

経営行動研究学会第 33 回大会統一論題趣意書

経営行動研究学会第 33 回全国大会WG

(文責:三戸浩、井上善海)

1. 第 33 回統一論題;

「グローバリゼーションとリスク(2)

:グローバル・リスクと経営行動:市場・国家・体制・自然」

* 第 32・33・34 回全国大会統一テーマ(2022.4.30 常任理事会承認)

第 32 回「グローバリゼーションとリスク(1):ステークホルダー資本主義と経営行動」

第 33 回「グローバリゼーションとリスク(2):リスクマネジメントと経営行動」

第 34 回「グローバリゼーションとリスク(3):パーパス経営と経営行動」

2. 第 33 回統一論題趣意文;

新型コロナ禍とウクライナ侵攻はほとんどの人が予想しなかったできごとであり、販売活動・生産活動や雇用において企業の経営行動に与えた影響も大きかった。新型コロナ禍とウクライナ侵攻によるマイナスの随伴的結果は、ともに経済のグローバル化がもたらしたものであろう。私たちは、パンデミックは歴史的事実であっても、いまの経営行動には関係がないと思っていたのではないだろうか。第 2 次世界大戦後、内戦や内戦への大国の干渉はあっても、近代国家間の国境変更を目的とする戦争、しかも、それを安保理常任理事国が起こすなどほとんど想定などされていなかった。地球自然環境との関係でもたらされる経営行動におけるリスクや、国内外における格差がもたらすリスクは、昨年度第 32 回大会で問題とされた。

特定地域で生じたことがグローバルに拡散し、他国の出来事が経営行動に大きな影響を与えることはこれからも決して珍しいことではないであろう。昨年度常任理事会において、「グローバリゼーションとリスク」を 3 ヶ年連続の大会テーマとした所以である。

2年目にあたる第 33 回大会の統一論題を、「グローバル・リスクと経営行動:市場・国家・体制・自然」としたい。企業が「グローバリゼーション」に対応しなければならない、ということは自明であるように受け取られていたが、その「グローバリゼーション」とは「市場のグローバリゼーション」であり、これまでそれは「肯定的」にとらえられていたのではないだろうか。だが、「市場のグローバリゼーション」は人・モノ・金・情報が国境を超えるものであるがゆえに、国家間の関係を大きく変えた。米露・米中という旧体制間のコンフリクトが近年急激に再燃しているが、前年度(第 32 回大会)にも問題とされた「国家間の格差」がもたらされたがゆえに、「グローバル・サウス」対欧米という新しい構造も生み出されている。このコンフリクトは「自由 vs 統制」「民主制 vs 独裁」という「対立」でもあり、新型コロナ禍への対応にも大きな違いを見せた。

世界は市場により「ひとつ(に統一された)」になったわけではなく、新たな対立・緊張関係が生じている。また、経済活動のグローバル化は自然環境に大きな影響を与え、グリーン資本主義や SDGs などという「グローバルな課題」を生み出してきている。「グローバリゼーション」は新たな段階を迎えているのではないだろうか。あらためて「グローバリゼーション」を「市場・国家・体制・自然」の相互作用の観点から確認した上で、環境変化に対応すべき長期的観点に立った「経営戦略」の立案が求められるのであろう。

自明のように受けとられていた「リスクマネジメント」も、対応すべき「リスク」は単純ではないであろう。確率的に「予想可能」なものもあれば、不可能なリスクもある。過去の経験則から対処できるリスクもあれば、できない不確実なリスクもある。「リスクに対する対応、マネジメント」と言ってもその内容は極めて複雑である。

今大会では、新型コロナ禍とウクライナ侵攻から受けた経営行動の影響をまず確認したい(サブテーマ1)。続けて、「グローバリゼーション」の現状と構造と、グローバリゼーションという流れそのものに対する検討・再考、そして「リスク」とは何か、その定義・構造・実態を確認した上で(サブテーマ2)、「グローバリゼーションがもたらすリスク」を明らかにしてみたい(サブテーマ3)。大会締めくくりのシンポジウムでは、以上の成果を踏まえ、「グローバリゼーションがもたらすリスクへの経営行動の対応」を討論し、第 33 回大会としての結論を得たい。

これらサブテーマおよびシンポジウムでは、昨年度問題とされた「企業とは誰のため、何のためにあるのか」を意識しながら議論し、次年度の「パーパス経営」につなげていきたい。

3. サブテーマ;

(1) 新型コロナ禍とウクライナ侵攻が経営行動に与えた影響

新型コロナ禍とウクライナ侵攻は、日本のみならず世界中の国々の経済活動・社会活動に大きな影響を与えた。非正規従業員の雇用が大きく縮減し、シングルマザーの家庭の児童にまで大きな影響が及んだ。雇用は守られたとしても、働き方がテレワーク、ワーケーションなどという出社しない勤務形態を採らざるを得なくなった。また、顧客との接触ができなくなった業態において、通信販売、ケータリング、テイクアウトという販売方法がとられ、関連産業は大きく業績を伸ばした。人間同士の間の接触を避けねばならなくなったため、オンラインが活用されたが、これまでインターネットの活用が求められていながら、十分な対応をしてこなかった企業・産業において一挙に進む一方、オンラインでは十分に代替できないビジネス、活動は大変苦しい状況に至った。朝鮮戦争、ベトナム戦争は「特需」をもたらしたが、この度のウクライナ侵攻はエネルギー、食料などの供給に大きな影響を与えたため、企業はその対応に苦しんでいる最中である。従業員(雇用・働き方)において、生産・販売において、また、新型コロナ禍に対応して医療関係商品の安定的供給が求められたし、ロシアのウクライナ侵攻においては、ロシアとのビジネスを続けることの正当性が問われたが、今回、社会的責任はどのように求められたのか。以上、生産・販売、雇用、CSR などにおいて企業行動にどのような影響・変化があったかをまず確認していきたい。

(2) 「グローバリゼーション」と「リスク」とは何か

「グローバリゼーション」、「リスク」、共に目新しい概念ではない。だが、「グローバリゼーション」と今回の二つの出来事との関係性をどれだけの確に説明できるであろうか。また、「リスクマネジメント」の必要性・重要性は夙に指摘され認識されてきたようであるが、今回二つの出来事に対する「リスクマネジメント」はどれだけ適切に行えたであろうか、また可能であったであろうか。新型コロナ禍にしてもウクライナ侵攻にしても、今後、類似の出来事が生起する可能性は十分にある。あらためて「グローバリゼーション」と「リスク」という概念の「背景・構造・本質」や「定義・概念」などを確認してみたい。

(3) グローバリゼーションがもたらすリスク

「グローバリゼーションがもたらすリスク」は、「製品、雇用、資本などの市場のグローバル化」そのものから生じるだけでなく、「グローバリゼーションによる国家・体制の変容など」からもたらされるリスク、「商品や人間の移動のグローバル化が自然に与える影響」からもたらされるリスクなど多様・複雑化してきている。「グローバリゼーションがもたらすリスク」を、サブテーマ(1)(2)を踏まえて、あらためて確認していきたい。

4. シンポジウム(テーマ)

経営行動として、グローバリゼーションがもたらすリスクにどう対応するか？

「新型コロナ禍とウクライナ侵攻」という二つの歴史的出来事を手掛かりにしつつも、広く「グローバリゼーションがもたらすリスク」とそのリスクに対する経営行動を考えていきたい。

(※) 2回のWG研究会では、大変貴重なご意見を頂いた。

興味深かったのは、「新型コロナ禍とウクライナ侵攻」という当初の問題関心に対する意見は少なく、統一論題(仮)の「グローバリゼーションとリスク」に対して、「リスクの定義・概念」と「チャイナ・リスク」などのいま日本(企業)が直面しているカントリーリスクに関心・意見が出されたことである。本案はそのことを反映させた。